

---

**私は、レズなんかじゃない。**

シエル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は、レズなんかじゃない。

### 【Nコード】

N8123Y

### 【作者名】

シエル

### 【あらすじ】

私は、小学校から高校の大親友に

…恋をしてしまった。

## プロローグ（前書き）

レズ物です。

レズ等に偏見がある方はみないてください。

読んで感想をくれたら嬉しいです！

## プロローグ

私の名前は、今野美和子。

良く友達にはみわちゃんって呼ばれる。私には大好きな親友がいる。彼女の名前は、小岩美咲。小学校から高校まで全部同じクラスの幼なじみだ。席もいつも近い。仲良しすぎて、皆にレズなんじゃないかって言われたこともある。私は…そうなたらいいなあって思ってるけどみーちゃんはそんなこと言われても引くだけで親友ってこともなくなっちゃうんだろうなあ……。

私はそれだけはイヤだった。ずーっと親友なのに、そんなことで親友じゃなくなったらイヤだもの。

だから、この想いは私の心の中にしまっておくの……私はレズなんじゃない。って……

だけである日、私の部屋でいつも通りお話していると私は、とんでもないことを言ってしまったの。

## 大好きな親友

私は馬鹿だ。なんてことを言ってしまったのだろう。

みーちゃんが、「みわちゃん何か悩み事でもあるの?」なんていうから私は自分の想いをみーちゃんに伝えてしまった。昔からの付き合いだから、悩みがあるなんてことはお見通しみたいだった。

みーちゃんは黙って聞いてくれていた。

私は、みーちゃんが大好きだったこと。恋人になりたいってずっと想っていたこと。

全て、全て話してしまった。

ああ…終わった。これで嫌われたよなあ……。

美咲「それで……?みわちゃんは、どうしたいの?」

え?

美咲「私がそんなことで、みわちゃんのこと嫌いになると思ってる?話してくれて凄いいよ……」

私はその言葉に安心して泣きそうになった。

みーちゃんはなんでも私のことお見通しなんだなあ。

美和子「私はね、この事を話してみーちゃんは引くんじゃないかって怖かったの。ずっと心の中に閉まっておこうって決めてたの…でも言えてスッキリしたよ!」

ニッコリ笑った私をみーちゃんはみつめていた。

すると……

みーちゃんは、私の唇をみーちゃんの唇で塞いだ。

ビツクリした。

頭の中が真っ白になった。

長いことキスをして、2人は唇を離した。

美咲「ごめんね……？あたしもみわちゃんが大好きだよ。今日から恋人になるっか……？」

うそ……ホント？

嬉しすぎてボーッとしてしまった。

しばらくして我に返って、私はみーちゃんにギュッって抱きしめた。

美和子「大好き、大好き……みーちゃん大好き……？」

そのまま2人はしばらく抱き合った。

幸せって？

私とみーちゃんは付き合うことになった。  
大好きなみーちゃん。一生大切にするって私は誓った。

その日は、バイバイをしてみーちゃんは自分のお家に帰っていった。  
明日ペアリン買いに行こうねと約束をして。

毎日お話をしているのに私たちは毎晩のように携帯でお話をしていた。  
いつも携帯でお話するのは23時くらい。

しかしその日は、何故か電話がかかってこなかった。

…寝ちゃったかな……。毎日のように電話をしていたから可笑しい気分だった。

なんだろう、この気持ち…

嫌な予感がした。

でも私にはどうすることも出来なかったため、お風呂に入ってご飯を食べて眠りについた。

不安なまま寝たから目覚めが悪かった。

……みーちゃん何かあったのかな。

朝ごはんを食べて学校に向かう。

途中にみーちゃんちがある。いつも一緒に行ってるからピンポンを  
押した。

だけど誰も出ない。

なにがあったの…？あのあと、バイバイしたあと、なにがあったの…？

私は心配で心配でたまらなかった。

携帯も繋がらない。

なんで、なんでっ……

どーしたの……？

私は泣きながら混乱しながら、学校へ走って向かった。

生きるって何だろうか。

みんなちゃんと席についている。だけどみーちゃんがない。皆は「あれ、みーちゃんと一緒じゃないの？」などと聞いてくる。そんなの…私が知りたい。

担任が入ってきた。

早速の報告に私は耳を疑った。

『皆に大事なお知らせがある。』

小岩…は、昨夜事故に合い意識不明の重体らしく入院中だ。』

うそ……………。頭の中が真っ白になった。

先生、嘘って言うてよ…………。

「嘘って言うてよ、先生???」私はいつのまにか叫んでいた。

いつもおとなしい私がこんな行動を取るのが初めてだったため、先生もクラスメイトも全員驚いていた。

私は泣きながら訴えた。

「誰がそんなことしたの？犯人は誰?? ねえ、教えてよ先生！先生  
っつ……………」

先生の胸倉を掴んで、叫んだ。叫びまくった。

友達が私を落ち着かせようと必死に慰める。  
先生からは一旦離れて床に座り込んだ。

……折角付き合えるようになったのに。  
誰かがこの幸せを奪った。

私は授業を受ける体力も無く、保健室にずっといた。  
方針状態の自分。…気持ち悪い。  
下校時間のため、鞆を持って学校をでた。

まだ、涙がとまらない。  
みーちゃん頑張れ。  
みーちゃん生きろ。  
みーちゃん生きて。  
みーちゃん大好き。

色んな想いが私の頭の中を横切った。

翌日、私は学校を休んでみーちゃんがいる病院へ向かった。

「ごめんなさい…」

ベッドに横たわっていたみーちゃん。ベッドで目を瞑っていたみーちゃん。動かないみーちゃん。

昨日の夜、バイバイしたあと事故にあったんだ…

みーちゃんのお母さん…。

母「まだ意識が戻ってないのよ…貴女の家から出てすぐに車にひかれたの…。」

みーちゃんのお母さん、私のせいだって言ってる…？

いや、そういう風に聞こえる…

美和子「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…？」

私は謝りながら泣きながら病室を出た。私のせいだ、私のせいだ…

…。  
もう、みーちゃんに合わせる顔がない。もう、合わないようにしよう…。

病院をあとにして、私はペアリングを買いに行った。

2つで1万円くらいのを買った。

そして手紙付きでみーちゃんの病室に置いて家に帰った。

私は引きこもった。

学校にも、外にも行きたくない。死んでお詫びするしか…ない…

…よね…



死んだらどうなる…？

私は家にある包丁を手を取った。  
自分の方に向けた瞬間。

『おい、なにやってるんだよ？』

いきなり男の人が入ってきて私を止めた。涙を流しながらその人を見上げる。

彼は青柳賢<sup>あおやぎけん</sup>。20歳の大学生。この人は私の家の隣に住んでいる人だ。

私の両親がいないときは良く面倒をみてくれていた、優しいお兄ちゃん。

4つも離れていてすっかりしている。

勉強もいつも教えてくれている。だけど、そんな優しいお兄ちゃん……今日はなんだか怖かった。

賢『なにをやってるんだ、まったく……呼んでも誰も返事しないから心配して来てみたら……何があったか知らないが自殺なんてすんなわかったな。』

賢にい、久しぶりにみた怖い賢にい。

私は安心したのかお兄ちゃんに抱きついて大声で泣いた。

美和子「賢にいちゃん、はなし……聞いてくれる……？」

賢『ああ、聞いてやる。ゆっくりでいいからな？』

ゆっくり、本当にゆっくり今までのこと全て話した。親に言えないことは全て賢にいに言う。

みーちゃんと付き合うことになったことも、もちろん言った。

賢「そうか…。なあ、美和子。お前が死んだら悲しくなる人がいるんだぞ？俺だつて、お母さんやお父さんや、その…みーちゃんつても目が覚めて美和子がいなかったら寂しいんじゃないか？」

お兄ちゃんが熱く語っていた。

確かにお兄ちゃんの言うとおりかもしれない。死んだらみーちゃんと会えなくなるもんね……

美和子「そうだった、私はなにをバカな事してたんだろ？お兄ちゃんありがとう、本当にありがとう！」

賢には笑顔になった私の頭を優しく撫でてくれた。

しかし翌日から嫌な日々が始まる。

友達からメールがきた。

【みーちゃんを殺したって、ホント…？】

え……………？

## 恋。

みーちゃんのお母さんが学校に、皆に言いふらしたんだろう。確かに私が殺したようなものかもしれない。だけど死んでない。みーちゃんは死んでない。みーちゃんはまだ生きてる。

【なに言ってるの？殺してなんか、ないよ？】  
とメールを返したがそれ以来メールが来なくなった。  
大親友なのに殺すわけじゃないじゃない……。

夕方お兄ちゃんに止められたばかりだったけど、ハサミで腕を切るしかなかった。

切るとなんだか気持ちが悪くなった。

今はお母さんもお父さんも会社で家には私しかいなかった。ティッシュで血を止めながらリビングに向かった。リビングにはお兄ちゃんがいた。

美和子「あれ、どうしたの…？」

賢「切ったのか……？」

美和子「うん。切らないと気が休まらなくて…」

そう言うとお兄ちゃんは怒鳴り散らした。

賢「それで死んだらどうするんだよ？お前本当にダメなやつだよ。美味しいオヤツ持ってきて一緒に食べようかと思ったのに。。」

私はビツクリした。

お兄ちゃんってこんなに怖かったっけ……。

美和子「ご、ごめんなさいっ…お兄ちゃん私を見捨てないで…友達にも見捨てられたら私にはお兄ちゃんしかいないのっ！もう、しないからお願いつっ…」

賢には泣いている私をソツと抱きしめてくれた。暖かった…。

するとお兄ちゃんは私にキスをしてきた。

え……………

しばらくしてお兄ちゃんの方から離れていった。

そのあとお兄ちゃんは口をゆっくり開いた。

お兄ちゃん…

ありがとう。

賢「俺は……。俺はお前が死んだら生きていけない。わかるか？俺はお前が好きだったってことだ。」

え？

お兄ちゃんが私のこと、好き…？  
そんなこと思いもよらなかった。

ああ、妹として好きだったってことか。

私は勝手にそう解釈をした。  
すると…

賢「お前は妹として好きなんだと思ってるだろ？そうではなく、俺はお前を女として好きなんだ。昔からな……」

お兄ちゃんは感じが良い。私のおもっていることをすぐに分かってしまふ。私は顔にすぐに出るんだろうなあ。

美和子「お兄ちゃん…ありがとう…だけど今の私には誰かと付き合うという資格ないと思うんだ。みーちゃんのこともあるし…。」

お兄ちゃんのこと好きだよ？大好き。私も小さい頃から気になっていた。かつこ良くて優しくて頭の良い隣に住んでいるお兄ちゃん…。

美和子「返事は、もう少し待ってくれる…？」

賢「そうだよな…。いや、わかってたんだ。美和子がそう言うだろうって。だけど自分の気持ちを伝えない訳にはいかなかったんだ。

ごめんな………」

お兄ちゃんが寂しそうな顔をしていた。こんな顔も見るのは初めてかもしれない。

美和子「あ、お兄ちゃん！私お兄ちゃんのこと好きだからね。それだけは私も伝えておく………」

私は照れながら言う。

そしてお茶の準備をしようと台所に向かった。

お兄ちゃんが持ってきてくれたのはドーナツだった。ここのドーナツ美味しいんだよね。

美和子「お兄ちゃんドーナツありがとう。ママたちも喜ぶよ。お兄ちゃんコーヒーでいい？」

賢「ああ。さんきゅ…」

お兄ちゃんの照れ隠しか、私の方を見てくれなかった。

ガシャーンツツ？

え…？

頭の中が真っ白になった。

なにが起きたのかわからなかった。

償い

え……………？

お兄ちゃんが、こっちをみて驚いている。  
なんで…？

自分を見ると、お腹から下半身にかけて熱いお湯がこぼれていた。  
手が滑ってヤカンを落としてしまったみたいだった。

美和子「あつつ……………」

2、3分ほど放心状態だった私は我に返った。  
90度くらいのお湯が私の身体にかかっていた。

お兄ちゃんはすぐさま救急車を呼んでくれた。  
その次には、氷で私の身体を冷やしてくれた。手際がよかった。  
そうか。お兄ちゃんはお医者さんになりたいんだよね。

美和子「お、お兄ちゃんお兄ちゃんっ……………私どうしたらいいのっ…  
？」

私はもうパニックだった。  
こんなことは初めてだから。

私は救急車の中で気を失った。  
しばらくして、気が付いたら病室だった。

美和子「ここは……………？」  
賢「……………病院だよ……………」

お母さん「良かった…無事で良かった……………」

お母さんは泣いていた。

仕事を切り上げて来てくれたんだ。

お父さん「お前はなにをやってるんだ！」

お父さんは昔から厳しい人だった。かなり真っ赤な顔をして怒っていた。私より仕事の方が大切という人なのだ。

美和子「迷惑かけて、ごめんなさい……………」。

お父さん「まったくだ。俺は仕事が忙しいんだ。戻るぞ。」

お父さんは、すぐに病室をでた。

ん……………？

なんか、違和感。腕を違和感のある脚にやった。

また、頭が真っ白になった。

え…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8123y/>

---

私は、レズなんかじゃない。

2011年12月4日22時54分発行